きびのさと
NO.94 月刊
第三輯 寺院篇 第十八号
昭和四十一年四月一日 発行（非売品）
岡山県都窪郡吉備町東町一二五字垣方 呼電四三七番
吉備観光協会

○ 3性山中正院（その三）

枚浦家の墓標（枚倉氏の家臣）

枚浦氏は元禄十六年家臣帳に枚浦九右エ門表祐筆、禄高十石、享保十四年家臣帳に外様徒小性七石、明治二年改帳に枚浦保祐（禄高不明）とある。

一、一如宗竟院行善日喜信士　枚浦惣兵衛　元文四巳未五月十九日
　　行満院妙善日進信女　　明和元甲申歳十月六日

一　休月院妙等信女　妙法秋月童子　元文三戊午九月十八日　暫要童子寛保二壬戌九月十六日
　　秋岸清休　享保五庚子八月廿四日　林清童子　享保五庚子八月十三日

一　覚性院妙幽日玄　宝暦六丙午天十月十三日　枚浦惣兵衛　妻

一　玄逝院道覚日照居士　天明元年辛丑　五月三十日卒　枚浦惣右衛門保正

一、一心院善聴日休居士　天明六午十月十日　枚浦他人衛保慶

一　逝正院妙操日持大姉　文政四巳年十一月十三日行年七十九　枚浦保慶之母（戒名不明）
　　辞世　氣ふよりはうき世の塵を拂ひつつ口なす法の国に口口なむ。

一　閑穫院妙実日如大姉　安永八己亥歳九月二日枚浦惣兵衛保正娘。能解妙成信女　文政九丙戌年十月十八日孔俗名おきよ。

一　常勤院休意日傳居士　安政二乙卯年七月二日。常恩院妙意日住大姉　安政五戊午年二月九日卒

一　実相院清運信士　享保五庚子歳十一月十日　真如院妙清信女　宝暦六丙子七月十七日

一　徳照院妙指日淨大姉（逆修）過去帳に明治四十三年六月四日孔（直之丞の養母）
　　本光院自証日永居士　文久三癸亥年八月七日卒　享年五十三　枚浦惣兵衛保正
　　真照院観道信士　明治十五壬午年四七月一日卒　枚浦惣兵衛保正二男寿せ三津熊辰治武從。

一　真淨院覚道日念居士　明治廿八年十二月六日孔　枚浦保祐。真岳院妙道日唱大姉　昭和十八年九月十三日享年八十一、（保祐の妻）

枚浦氏系譜（略）

枚浦惣兵衛
- 妻　飛左　文政九年二月廿八日生　岡藩士畑重吉の長女
- 保祐　安政四年五月廿三日生　明治廿八年十二月六日孔
  - 妻　本以　文久三年五月廿五日生　撫川領家臣岡田織衛の長女
    - 直之丞　養子　吉備郡三須村高杉氏の子、号は直翁　絵画に長ず
    - 鶴　昭和十九年九月十五日孔　六十七才（直之丞妻）
    - 女　明治廿三年二月十日生　同十五日孔
    - 保大　旧撫川領士戸川氏の家臣岡田繁の経嗣、昭和十二年三月八日孔　四十七才
  - 側女　某　明治四十三年六月四日孔
  - 男　津熊辰治（津熊家をつぐ）

△ 枚倉昌信の側室は東都（江戸）芝手丁町の某女にして昌信との間に二人の女子を生み、庭瀬に住し後ち東都谷中の屋敷に移る。頼によつて家臣の枚浦兵七に嫁ぎ、生涯五人扶持を給せられていた。兵七は系譜中にある惣兵衛（宗竟院）の幼名といわれ某女は宝暦六年十月十二日孔去した覚性院に当る。

○ 桐野家の墓標（枚倉氏の家臣）

山仙院遠進　知光丁秀善了妙光居士　元文二乙巳十月十二日
遠理院妙仙　霊寛延二己巳三月十一日桐野氏。妙源妙仁　桐野氏。

桐野家系譜（略）

桐野俊造（修造）
- 妻　津留　嘉永五年二月八日生　同藩士角田在潔の姉
- 弘　実は庭瀬村楢村貞造の二男　弘化四年一月三日生
  - 葉津　明治三年五月十日生　久米村（岡山市）城口千代治に嫁ぐ
  - てる　明治八年八月廿日生
  - 喜男　明治十六年二月十八日生
  - 和平　明治廿一年七月五日生
- 明治十二年八月四日生

明治二年家臣帳に外様無格禄高五石三人扶持桐野修造とある。元文以后の墓石は見当らず宗旨を改めたのであろう。子孫は明らかでない。同家臣帳に同姓桐野肩蔵組目附格三両一人半扶持とあるは同族と思われるが不明。

第93号つづき

○ 清水山應德寺

吉備町下撫川の田園道、町筋の北側にある臨済宗の寺院にして京都東福寺の末寺である。

一、石橋を渡ると左側に、地上高さ一三七糎に二五糎角の方柱石碑に

表面「中備八十八ケ所 第五番 札所 應德禪寺」

中備三十三所 第廿八番

右面「寄附者 池上梅次郎 曽我元次郎 田口兵次郎 荒木崇次郎
板谷與次郎 曽我登羅 栗坂伊平 荒木条次郎
波勢葛三郎 中島保蔵 栗坂関三郎 佐々木恒男
太田三造 雑波国次郎 松本此登 宮本音蔵
太田忠造 雑波菊次郎 黒島忠吉 平松富三郎」

裏面「明治三十六年七月廿七日 発起人 小倉千万吉 荒木源吉」

一、傍に高さ一一〇糎の三段角の台石の上に、一八七糎の立像地蔵菩薩を安置している。左手に深沙の切見を抱いている姿である。台石の上段、表面に「法界」。他の三面に「当山力生共檀信奮志穴穴穴穴(ちゅんせき、墓)門墻之際古墳断碑奕世缺損苔之禮者再等蔦里章埋玉樹於固抗矢蒭式独妙経一石一字北旌以顧王薩垂聖容粹資先覚神游兼虞後日北悔懐冀濁末含識触此勝縁挑法身慧日云爾

前真如真卿識　　現住　敬道比丘　発起

嘗天保十五甲辰夾則穀旦」とある。地蔵菩薩の裏面に「倉敷住石工徳松作」と刻んでいる。寺では檀家と信者の協力心墓所の墳をつくる際、古い先祖の墓や断碑を掘り出した。これは代々の霊に対して礼を缺いでいるので、再び集めて懇ろに埋葬し供物をし、読経を挙げた。そして経文を一石一字に書いて埋め奉く祈った。定めし祭る人もなく迷

四三

っていた霊魂も佛陀の本体に帰り浮ぶことが出来たであろう。という解釈になる。この地蔵尊は無縁になっていた諸霊の冥福を祈るためにたてられたものである。いかにも佛陀の慈悲深い聖容の粹姿を表現している。

周囲に石の玉垣をめぐらしている。それに「寄附人 袖岡小三郎 太田嘉吉・雑波定五郎、荒木岩太郎、雑波常蔵・太田三造、雑波猪三郎 敬道建焉明治十二年三月」とある。これは後世つくられたものである。

(袖岡小三郎は明治十四年四月廿七日七十一歳死「第九輯系譜篇撫川吉岡屋参照」。太田三造は明治廿九年七月廿日死妻は日畑西組森田佐太郎の長女リン。雑波定五郎は明治十九年八月四日死。太田嘉吉は明治廿二年正月廿六日六十四歳死。荒木岩太郎は明治十六年五月廿三日死・妻は加茂村練尾三右エ門の五女加津。雑波猪三郎は明治廿九年九月十一日四十九歳死。妻は帯江新田村藤原和平の妹栗。猪三郎は明治廿六年の大洪水の時・山陽線の築堤を切り崩して取調を受け警察署に引致されたことがある。雑波常蔵は明治廿年五月一日七十三歳死。「第七輯人物篇参照」)。

右側には高さ六八糎の三段の台石の上に、上と下に蓮台をあしらった一一二糎の円筒形の柱石を置き、更にその上部に六九糎の愛染明王の座像を安置している。

柱石の下部に「石工浅口郡寄島 山崎市松」とあり。また上部には「四国、西国、秩父、坂東、供養塔 撫川村字西大橋 施主 雑波常蔵 明治廿八乙未年四月 佛生日(釈迦の誕生日で陰暦四月八日)建之 為地子料金拾五円納之」と刻んでいる。また花崗の石に雑波菊次郎と彫っている。苟治郎は常蔵の二男である。雑波家は屋一族の墳墓数十基が当山の墓地にある。

(この愛染明王という佛様は愛欲と貪欲を成める密教の魔神である。方失や五鈷杵(ごこしょ)

「真言宗の用いる佛具」などの武器を持って激しい怒りを表現している。人間社会の邪悪に対して向けられている姿である。それがやがて痴情を戒め、恋のとりかりをする佛様にかわって、悪の成就と幸福を祈るようになったのである。また銘文に四国はいうまでもなく四国・西国は九州一円、紀又は関東地方、坂東とは近江国逢坂山から東の国々の総稱である。つまり日本全国を意味するものである〉。

正面、両脇に潜り門を有する山門を這入ると入母屋本瓦葺屋根の本堂に出る。右に庫裡、左に接して「大悲醫王殿」の扁額をかかげた二間に四間の御堂がある。医王殿は入母屋造にして鴟尾に三本枝、丸瓦に梅鉢の文様を配している。これは田嶋川領主戸川氏の定紋にして戸川氏の寄進によって建立されたものと考えられる。

医王というは薬師如来と同じく衆生の病患を救い、或は光明の消滅して暗い世病に苦しむものに法樂を授けられるといわれる菩薩である。

当山の本尊は一尺五寸の木造座像の釈迦牟尼佛である。創建について備中誌その他の傳記を繙くと、いま脇立として祀られている石造座像の薬師如来は、往昔この附近の川底から掘出したものである。調査した所、この石佛はもと上保田あたりにあった、穏成寺という古寺の本尊であったが、大洪水（足守川）のため寺宇は押し流されて廃絶し本尊のみ永く川底深く埋没していたことが判り、郡民が相謀ってここに一草庵を建てて安置したという。時に或る旅僧を永く止めて祭祀したことに始まり次第に廃民の信仰を得て開展した。偶別峯国師が禪宗弘通のため新たに一宇を建立しこの寺を改宗したと傳えている。もとは天台宗に属して大王寺と稱へていたが、穏成寺の創建が白河天皇の應徳年間（一〇八四～一〇八六）との傳えに基いて清水山寺に改名した。（いまは山号を清水山という。これによって考えると、庭瀬の清水山松林寺と同じく延元年間播磨の大守赤松次郎左衛門尉則村の帰依によって創叡せられた庄村栗坂の少融山定林寺（いまの松林寺の前身）などとその軌を一つにするものと思われる。当寺は元亀、天正の武家蜂起のため兵戦に遭い堂塔は悉く焼失し、僅かに法灯を継承する状態であった。其後徳川幕府が成立し、この地は戸川肥後守達安の所領となったが、戸川氏は日蓮宗の熱狂者であったので依然再興の機運に恵まれなかった。しかし幸いに絶法の難を免れる程度であった。偶正保年間に日畑にあった石地蔵尊の切截（きりたち）事件（第十輯傳説篇参照）を起した戸川三代藩主戸川安宣がその祟りを恐れて環山禪師を招聘して当山の再興に努め旧觀を改めたという。よって環山禪師をして中興の祖と仰ぐのである。其後朽壊したので正徳五年に藩主の寄進と檀信徒の淨財を募って諸堂を修覆し、ついで安永五年には庫裡、天保七年には山門と相次いで修理を加へて今日に至っている。

脇立に安置する恵信僧都の作と傳へる観世音菩薩の木造坐像の御尊体は初めこの地の豪族荒木肥後守（中撫川の須佐之男神社、吉備津神社に荒木氏が奉納した献灯がある。肥後守と何等かの系統があるのではないかと考えられるが、知るべき資料はない）。の護持佛であったが、後ちに下撫川の平川某に傳わり、当山に寄進した由緒ある佛像である。

△ 当山歴代の住転

一、別峯和尚　開山
一、松巖和尚（永享の頃）
　　絶法
一、環山宗宣禪師　中興（正保の頃）
一、利岳禪師
一、貫巖禪師（正徳の頃）
一、潭尚和尚
一、大嶺和尚（延享の頃）
　　絶法
一、梁州和尚　中興
一、井上逸堂和尚（宝暦の頃）
一、衝天和尚
一、法巖和尚

上氏はその一族にして秀峰玄道あり累代の墓は観龍寺にある〉

一、秀峰和尚　（文化の頃）　（当山のことについて、いま少しく調べたいと思ふて寺を訪れたが住職は「そんな必要はありますまい」とすげなく断られたのには面くらつて引きさがつた。お坊さんのなかには、ごうした人がまゝある。）
一、霊道和尚
一、心界和尚　（安政の頃）
一、敬道和尚　明治廿一年二月廿三日死　撫川産雑波姓

△　墓地は医王殿の御堂の西裏にある。堂の左手々ゝ墓地に入る所に六地蔵尊の石佛と「寛文十二辛丑天壬子六月十四日、三界萬霊等」と銘のある石碑がある。これには左り三つ廻りの巴の定紋を配してゐる。これは出雲藩士柳倉氏の寄進したものと思はれる。

左側には
前住東福寺当山敬道和尚大禪師
師諱玄格邑雑波政則子　六才得度　於柘林排泉　十六遊方　後住当山嗣法心界
明治三十一年陰二月廿二日示寂俗勝七十一世　寿七十七

とある。芋墓にして、敬道和尚は田挽川領主戸川氏の家臣雑波康右衛門政則の子にして幼少の頃、庭瀬の柘林寺の住職明泉哲禪師の弟子になり、諸国を修業し後ち当山に入り心界禪師の嗣法となつた人である。書絵に精通し現在この禪師の筆になる遺墨を保存している人があり郷土の産んだ高潔な名僧として其名が遺つてゐる。

東町の山口義夫は敬道和尚の筆になる佛画の掛軸を持つてゐる。銘に「前東福寺現應法門　敬道拝書」と書いてゐる。明治廿年頃の和尚が六十才前后と思はれる。

敬道和尚の墳墓から更に歩を運ぶと、檀家一般の墓である。

主なる墓碑を示すと

一、虎渡り之墓　白芋意照信士　明治廿一年十二月廿日　慈木磯次郎　六十三才
実山玄定信女　明治廿二年五月廿八日　妻勝　五十二才
浪花陳浪之門人（明治廿五年に信城寺にて東西大相撲興行の時の去詰人にして、三備に亘る相撲界の重鎮であつた。子孫は現在下挽川五番地に住レイ、七八）

◎宮田氏

一、清京院了然宗鄽居士　享和三癸亥十二月廿三日（姓名ナシ）
清蓮院月光永秋大姉　享和元辛酉七月二十日
元禄十一戊寅十一月初六日　宮田茂兵衛　父
（撫二編神社篇八幡神社、第十一編雑集篇芸能界の変遷参照）
（撫川領戸川氏の家臣）

一、雪壓院寒庭視松居士　宝永六己丑歳正月初三日　宮田茂兵衛　妻
聯芳院雲林永祥大姉　享保十九甲寅歳十一月初八日　宮田茂兵衛吉定
一、玉雲院芳秋元珠大姉　宝永二癸巳十一月念八日　俗名　宮田治大夫
層雲院雪岳雄梅居士　安永二癸巳十一月念八日　父母墓
一、実光院雪山道和大居士　天明六丙午天十月念四日
鳳體院徳山妙麟大姉
一、最勝院真岩義忠居士　天明七丁未年三月二日　宮田治大夫直宗墓
貞道院樵室智正大姉　文化十癸酉十一月十八日
一、等覚院了育居士　文化四丁卯秋八月念五日　宮田明卿墓
一、天成院天瑞正翁居士　弘化三丙午年十二月廿一日　宮田正翁墓
洞岩院智照妙恵大姉　嘉永六癸丑四月十日　同人妻
一、華厳院蓮臺日秀大姉　明治十七甲申歳八月一日享年二十有六歳小野八十八妻登久宮田末治長女
一、修学院孝岩幼貞居士　安永九庚子正月五日　母名　宮田義爾大
一、霊岳院実翁宗忠居士
宮田末治信好号暁成氏資性温和雑波康右エ門六男而襲宮田氏列班藩政十有余年維新
後藩置県之際出仕小田県後轉任愛媛香川之二県而専参與地方自治制度二十余年秋
県治上不勘補佐之功及老年帰郷後者企図公共事業不少竭力為遂為毎以齢七十歳卒于
時明治三十八年二月十八日

霊光院実性無相大姉
中桐嬬人諱栄備前国御野郡福浜村中桐竹八君長女也帰備中国挽川村宮田氏明治廿四
年九月廿八日歿讃岐国高松以夫子奉転於香川県也葬遺骨於挽川慈徳寺先塋次嬬人生

前治家有成蹟夫子宮田来治君碣宣序孺人行実及撰銘並藏在家茲唯表概略云爾

一、真源院宗道自覚居士
明治四十三年五月廿七日卒吉備郡日美村大月藤右エ門三男宮田英三郎三十歳

一、信炎院義方宗実居士　備前御津郡野谷村菅野坂野正愛次男佑名宮田信次
大正十一年二月九日逝　享年六十四

△宮田家略系

宮田茂兵衛重定……信吳――来治　平蔵　信好　天保七年閏月生　七十才
（寛延の項）　雄渡　康右エ門六男（奉還金百十二両拝領）　明治廿八年二月十八日死

信次　御津郡野谷村菅野坂野正愛の次男
安政六年十二月十二日生大正十年二月九日死六十四
英三郎　吉備郡日美村大月藤藤右エ門の三男、明治十年十二月十五日生同四十三年五月廿七日死岡山県正海院にて海死三十才
妻豆久　小野八十八の妻明治十七年八月一日歿
廿六才、華厳院蓮台白秀大姉（別項参照）
妻志　信次の妻　元治元年十二月廿五日生
大正十五年五月十六日死六十三才
交繁　吉備郡大丹村高坂藤左エ門の五男明治十六年三月廿八日生
多喜夫　早死
か津　明治廿一年五月五日生
初め英三郎と婚し死去后友繁を養嗣す。
友繁――和正　御津郡野谷村菅野正矩の三男
大正元年九月五日生　吉備町撫川御屋敷四六八番地に住す

△小野家略系

小野五良左エ門　文化三年六月廿五日死
以実子入信士
妻　其本妙常信女
文政十年七月廿二日死
――佐馬蔵　延安政元
――経長　左馬蔵　文久四年三月八日死四十五才
心正院義柚信士
妻　津満　早島町松尾真太郎の三女
文政二年十月十日生八十一才
明治廿二年九月十七日死
（墓石には廿日とある）
経長――千代子　上東村（庄村）内田伊三郎に嫁ぐ
天保十二年生　明治廿年八月廿三日死四十七才
――やそはち　五十三才
八十八　弘化四年一月十三日生
明治廿二年八月九日死
深達院玄武日宏信士
撫川田領主
戸川真達　明治四十一年　三十四才
七月廿一日死
妻豆久　撫川戸川氏田臣宮田来治の長女明治十七年八月一日死二十六才
――津子　明治十四年十月二日生
同四十年六月十九日死
二十七才
雄男　明治五年八月死
津高郡横丹村
田口某
秀夫　私生子明治廿四年十月十八日生大正五年四月道円に改め御門に入る。撫川の荒木喜助に養ひ北後ち宮田信次の子として入籍、後ち廃嫡す。在大阪という。
正義院妙潤日達信女
喜美子　私生子　明治廿八年一月五日生、小倉市魚町に移住すという。

一、真観院妙静信女　小野左馬蔵長女行年四十七才
寄尚　上東村内田伊三郎妻墓明治二十丁亥年四八月十三日、

一、常春信士　文政十一戊子年二月廿日（津子の曽祖父）

一、心正院義柚　霊　文久四甲子年三月八日行年四十五才小野左馬蔵経長
正義院妙潤　（経長の妻　死歿年月不詳）

其の他数基あるも湮滅して墓碑銘は判読しがたい。

おわり（この項未完）

吉備町・下撫川
油醤
ら
と
吉備局電171
有線9109
三上商店

建築業
吉備町下撫川
高島組
吉備局電238
有線6811